

『都市社会学・入門』は、文字どおり、都市社会学をはじめて学ぶ人のための本である。

第一に想定している読者は、大学で社会学を学びはじめたばかりの学生である。社会学の概論的な授業を受けたあと、社会学の個別分野の入り口の戸をたたくことになるが、そうした学生のための授業を思い浮かべながら本書を編集した。

第二に、社会学以外を専攻する学生で、都市に関心があって社会学に触れてみたいという学生も読者として想定している。たとえば、政治学や行政学、行政法などを学んでいる学生や、経済政策や都市経済に関心のある学生、そして建築、都市計画、都市工学を学んでいる学生などである。そのような読者にとっては、社会学の基礎的な分野よりも応用的な分野のほうがかえって入りやすいかもしれない。社会学の基礎概念については、できるだけ平易な解説をつけて、はじめて社会学に触れる読者にも読み通せるように心がけた。

第三に、これから大学で何を学ぼうかと考えている高校生や、すでに学校を卒業している多くの方々にも、都市社会学に触れていただきたいと願っている。それというのも、都市社会学を学ぶ意義は、社会に出てから市民として都市と関わるうえで必要となるものの見方、考え方を身につけるといふ点にあるからだ。都市社会学は市民として生きていくうえでの素養のひとつである。それが本書を貫く基本的な考え方である。

このように、本書は、都市社会学をリベラルアーツとして学ぶことを念頭において書かれている。しかし、内容が薄いというわけではない。それどころか、国際通用性のある都市社会学の講義をめざ

している。国際通用性があるというのは、海外の大学で学んでも、基礎的な部分は同じであるということだ。米国の大学のシラバスを見ると、その大半が、まず既存の研究を体系的に整理したうえで、最後に自説を付け加えるという形式をとっている。まずは通説から入るというオーソドックスなアプローチを本書でも心がけた。

もちろん都市社会学は、場所に敏感な分野である。英国の教科書が、国際通用性のある通説を紹介しつつ、英国や欧州の事例をふんだんに盛り込んでいるように、本書は日本語で書かれた教科書として、日本の事例をできるだけ取りあげるようにした。また、海外の都市の扱いについても、新しい試みをした。通例なら、途上国都市という章が設けられて、英語圏なら南米やアフリカの都市が典型として扱われることが多い。本書の場合は、東アジアならではの視点からアジアの新興工業国に注目し、国際的に活躍している海外の研究者に執筆を依頼した。

本書は序章も含めて15の章からなっている。しかし、半期15回の授業で1回に1章を扱うのは難しいかもしれない。第Ⅲ部はゲストスピーカーの講義と割り切り、授業担当者の自説にあてるのもよいし、クリティカル・シンキングの教材として使っていただいてもかまわない。本書を活用して、学生たちが将来の都市を担う市民としての素養を身につける一助としていただければと願っている。

最後に、本書の企画を立案し、最初の読者として原稿を読んでいた有斐閣編集部の四竈佑介氏には、感謝の言葉もない。写真、文献リスト、索引など細かいところまで編者のわがままを聞いていただき、本作りの楽しさを共有できたことはとても幸せであった。

2014年8月

松本 康

執筆者紹介 (◇は編者、執筆順)

◇松本 康 (まつもと やすし) ▼序章, 第 1, 2, 5, 6, 10 章, 第 12 章 (訳)

現職 立教大学社会学部教授

主著 『21 世紀の都市社会学 1 増殖するネットワーク』(編著) 勁草書房,
1995 年

高木 恒一 (たかぎ こういち) ▼第 3, 9 章

現職 立教大学社会学部教授

主著 『都市住宅政策と社会-空間構造——東京圏を事例として』立教大学
出版会, 2012 年

和田 清美 (わだ きよみ) ▼第 4 章

現職 首都大学東京都市教養学部教授

主著 『大都市東京の社会学——コミュニティから全体構造へ』有信堂高文
社, 2006 年

丸山 真央 (まるやま まさお) ▼第 7 章

現職 滋賀県立大学人間文化学部准教授

主著 「国家のリスキューリングと都市のガバナンス——「平成の大合併」の
地方政治を例に」『社会学評論』62 (4), 2012 年

水上 徹男 (みずかみ てつお) ▼第 8 章

現職 立教大学社会学部教授

主著 *The Sojourner Community: Japanese Migration and Residency in
Australia*, Brill, 2007

三田 知実 (みた ともみ) ▼第 11 章

現職 立教大学社会学部助教

主著 「衣料デザインのグローバルな研究開発拠点としての都市細街路——

東京都渋谷区神宮前における住宅街からの変容過程』『日本都市社会学年報』31, 2013年

張 元 皓 (ジャン ウォンホ /JANG Wonho) ▼第12章1節

現職 ソウル市立大学教授

主著 *Scenes Dynamics in Global Cities: Seoul, Tokyo and Chicago*, Seoul Development Institute, 2012 (共著)

任 雪 飛 (にん せつひ /REN Xuefei) ▼第12章2, 3節

現職 ミシガン州立大学准教授

主著 *Building Globalization: Transnational Architecture Production in Urban China*, University of Chicago Press, 2011

西 山 志 保 (にしやま しほ) ▼第13章

現職 立教大学社会学部教授

主著 『改訂版 ボランティア活動の論理』東信堂, 2007年

山 下 祐 介 (やました ゆうすけ) ▼第14章

現職 首都大学東京都市教養学部准教授

主著 『東北発の震災論——周辺から広域システムを考える』筑摩書房, 2013年

序 章 都市社会学の問い I

- 1 君たちはどう生きるか 2
「広い世の中の一分子」(2) 人はなにを生みだすか (3)
- 2 都市社会学の3つの問い 4
社会学から都市社会学へ (4) 都市はなにを生みだすか (5)
なにが都市を生みだすか (6) 都市とはどのような過程であるのか (7)
- 3 都市とはなにか 8
人口学的定義 (8) 物的定義 (8) 制度的定義 (9) その他の定義 (9)
- 4 学びの内容 10
本書の組み立て (10) 学びのつぎに来るものは (11)

第 I 部

都市化とコミュニティの変容
都市はなにを生みだすか

第 1 章 都市社会学の始まり 16

シカゴ学派

- 1 シカゴの発展 17
シカゴの誕生 (17) シカゴの成長 (18) シカゴ大火とコロンビア博 (18) 労働運動と社会改革運動 (19)

2	シカゴ社会学	20
	シカゴ大学 (20) シカゴ大学社会学科 (20) W・I・トマスと『ポーランド農民』 (21) 1910年代の世代交代 (23)	
3	シカゴ学派の都市研究	23
	ロバート・パーク (23) 人間生態学 (24) パークの「都市」 (25) 同心円地帯理論 (26) パークとバージェスの指導 (28) シカゴ・モノグラフ (28)	

第2章

アーバニズム

32

都市の社会的効果

アーバニズムの理論 (33)

1	生活様式としてのアーバニズム	34
	19世紀の社会学と都市 (34) 「生活様式としてのアーバニズム」 (36) アーバニズム理論への批判 (38)	
2	都市と社会構造	39
	スラムの社会秩序 (39) 『都市の村人たち』 (40) 「生活様式としてのアーバニズムとサバーバニズム」 (41) 有限責任のコミュニティ (42)	
3	アーバニズムと下位文化	43
	都市の非通念性と下位文化 (43) 下位文化理論 (45) 下位文化理論の性格 (47)	

第3章

都市生態学と居住分化

50

都市の社会-空間構造

1	人間生態学という視座	51
	同心円地帯理論の提唱 (51) 同心円地帯理論の視点 (53)	

2	同心円地帯理論からの批判的展開	55
	パターンをめぐって (55) プロセスをめぐって (57) モノ グラフとの接続をめぐって (60)	
3	東京の空間構造分析	61
	『東京の社会地図』 (61) 残された課題 (64)	

第4章 地域コミュニティ 66

その都市的形態と課題

1	地域コミュニティとはなにか	67
	コミュニティのふたつのとらえ方 (67) 共同生活圏としての 地域コミュニティ (68)	
2	都市化と町内会・自治会	69
	近代化と町内会論争 (69) 都市化と町内会の組織変容 (70) 町内会・自治会の現状と未来 (71)	
3	郊外化とコミュニティ形成	73
	コミュニティの問題提起 (73) コミュニティ・モデルの構成 (75) コミュニティ形成の展開と現在 (76)	
4	NPO と市民活動	78
	都市化とボランティア・アソシエーション (78) NPO 法の成 立と展開 (79) 地縁型 NPO の出現 (82) 都市型地域コミ ュニティの未来 (83)	

第5章 都市と社会的ネットワーク 85

親族・隣人・友人

	ネットワーク分析 (86)	
1	コミュニティのネットワーク分析	86
	基礎概念	

- 社会的ネットワーク (86) 関係 (87) カテゴリカル・ネットワークとパーソナル・ネットワーク (89)
- 2 「コミュニティ」問題 91
 コミュニティ喪失論とコミュニティ存続論 (91) コミュニティ解放論 (92)
- 3 アーバニズムとパーソナル・ネットワーク 93
 北カリフォルニア調査 (94) 親族 (95) 隣人 (95) 友人 (96)
- 4 日本におけるアーバニズム理論の検証 97
 都市度と居住移動の効果
 都市度と社会的ネットワーク (97) 都市への移住と社会的ネットワーク (99) 都市化と社会的ネットワーク (100)

第Ⅱ部

都市の危機と再編

なにが都市を生みだすか

第6章

都市圏の発展段階

104

都市化・郊外化・再都市化

- 1 ヨーロッパにおける都市圏の発展段階 105
 都市圏の発展段階モデル (105) 都市への集中と分散 (106)
- 2 日本における三大都市圏の発展段階 107
 日本の三大都市圏 (107) 都市化 (戦後) (109) 第一次郊外化 (110) 第二次郊外化 (111) 再都市化 (112)
- 3 東京における都市圏の発展段階 113
 「東京」とはどこか? (113) 東京の人口推移 (114) 東京の人口動態 (117) ドーナツ化現象と再都市化 (118) 都市圏の発展段階と社会構造 (120) 階層別居住分布 (124)

第7章

情報化・グローバル化と都市再編 128

新都市社会学からの展開

- 1 工業化と都市 129
重化学工業化と都市 (129) 都市問題と新都市社会学 (130)
- 2 情報化と都市 131
工業的發展様式から情報的發展様式へ (131) フローの空間 (132)
- 3 グローバル化と都市 134
世界都市仮説 (134) グローバル経済のなかの都市 (135)
分極化と二重都市 (136)
- 4 変貌する東京 137
収斂か、多系化か (137) グローバルな中枢管理機能の集積 (139)
分極化の実態 (143) 落日の世界都市? (145)

第8章

インナーシティの危機と再生 148

労働力の移動とエスニック・コミュニティの生成

- 1 都市化の進展とインナーシティ 149
インナーシティ (149) 大都市のインナーシティ (149)
- 2 都市化の進行と労働力の移動 150
1920年代の都市化 (150) 就業機会と人口集中 (152) インナーシティ問題と新たな都市政策 (153)
- 3 エスニック・コミュニティの形成 154
外国人住民の増加 (154) 池袋のエスニック・コミュニティ (156) ゲートウェイ地区としての機能 (158)
- 4 グローバル化のなかのインナーシティ 160
多様化するエスニック・コミュニティ (160) 人の移動とイン

第 9 章

郊外のゆくえ

164

均質から多様へ

- 1 郊外の誕生と展開 165
郊外の定義 (165) 郊外の起源 (165)
- 2 アメリカにおける郊外の特質と変容 166
サバーバニズムをめぐって (166) 多様化する郊外 (168)
- 3 日本における郊外の動向 170
郊外住宅地建設の始まり (170) 郊外化の進展 (171) 第二次世界大戦後の郊外社会の特質 (173) 郊外の変容：多様な郊外の出現 (174)

第 III 部

時間と空間のなかの都市

いかに都市とかわるか

第 10 章

都市再生と創造都市

180

横浜

創造都市とは？ (182)

- 1 創造都市政策の歴史的背景 183
横浜市の成長と苦難 (183) 六大事業 (184) 都市デザイン行政 (186) 文化政策 (187)
- 2 創造都市政策の構想 189
横浜市旧都心部の衰退 (189) クリエイティブシティ・ヨコハマ構想 (189)

3 「創造界限」の形成	192
BankART1929の誕生 (192)	旧第一銀行横浜支店 (193)
旧富士銀行横浜支店 (194)	日本郵船海岸通倉庫 (194)
北仲 BRICK& 北仲 WHITE (195)	ZAIM (196)
本町ビル 45 (198)	ハンマーヘッド・スタジオ「新・港区」 (199)
その他の展開 (199)	
4 創造都市政策の到達点と課題	200
「創造界限」の形成要因 (201)	「映像文化都市」の軌道修正と産業振興の課題 (202)
歩みを止めた「ナショナルアートパーク構想」 (202)	課題としての「市民主導」 (203)

第 11 章

文化生産とまちづくり

206

渋谷区神宮前「裏原宿」

1 文化生産とはなにか	208
都市成長の原動力	
モノの生産から知識の生産へ (208)	近年の研究動向 (208)
格好のフィールド「裏原宿」 (209)	本章の目的 (210)
2 ファッションの街「裏原宿」	210
渋谷区神宮前 (210)	昔の地名：竹下町、原宿、穏田 (210)
「裏原宿」「キャットストリート」 (211)	厳密な地域のルール (212)
3 住民の流出と「おかず横丁」の衰退	213
不動産バブル期以降	
不動産バブルはなにをもたらしたか (213)	住民が選択した行動 (213)
「おかず横丁」の衰退 (214)	
4 ファッションの街・裏原宿への変容	215
衣料デザイン・販売部門の集中 (215)	ヨーロッパで鍛えられたデザイナー (215)
大資本とデザイナーの関係 (216)	セレクト・ショップの増加 (217)
衣料事業者の低層ビルへの入居形態 (217)	

- 5 新しいまちづくりへ 218
 地域問題への取り組み
 衣料事業者と町内会・商店会の関係 (218) 騒音トラブル・強盗被害の発生 (219) 衣料事業者と地域住民のあいだの溝 (219) 「原宿神宮前まちづくり協議会」の設立 (220) 協議会設立の趣旨と活動内容 (220) 今後の見通し (221) 背景にある利害の一致 (222)
- 6 裏原宿を都市社会学的に考える 223
 グローバル / ローカル (223) 衣料デザインが細街路変容を促す条件 (223) 「裏原宿」から考える今後の課題 (224)

第 12 章 アジアの都市再編と市民 227

ソウル・上海・ムンバイ

- 1 ソウル市における都市再生 228
 ソウルの戦争被害と復旧 (228) 急速に進んだ都市化とダルドンネ (229) 清溪川復元と都市成長マシン (230) エンターテインメント・マシン (232) 反成長マシンと町の共同体 (233)
- 2 上海の都市再開発と住宅の権利 234
 転換を迎えた上海 (234) 上海の概要 (236) 都市の再開発と強制的取り壊し (239) 住宅権利運動 (241) 再開発と市民の権利 (243)
- 3 ムンバイにおけるスラム再開発と異議申し立て 243
 ムンバイの都市再開発 (246) 住宅の権利をめぐる動員 (248) 新自由主義と市民の権利 (249)

第 13 章 ボランティアと市民社会 252

社会を動かす新たな主体

1	2つの大震災とボランティア元年	253
	震災とボランティア (253) 東日本大震災とボランティア迷惑論 (254)	
2	奉仕活動から支えあいへ	255
	ボランティア論の展開 相互関係としてのボランティア (255) 市民活動をめぐる法制度の制定：NPO法の成立 (256)	
3	阪神・淡路大震災後のボランティア活動	257
	コミュニティの分断と孤独死の発生 (257) 「生」の固有性を支えるボランティア (258) 市場と交差するボランタリー・エコノミー (259)	
4	社会を動かす新たな主体	261
	社会的企業とはなにか 欧米のソーシャル・ビジネスを支える制度 (261) 市民によるアセット・マネジメント (263) 中間支援組織の役割 (265)	
5	新たな市民社会の形成に向けて	266

第14章

都市の防災力と復興力

270

現代都市が災害に向きあうとき

1	人間と災害	271
	東日本大震災の衝撃 (271) 災害と日本社会のあゆみ (272) 近代化の過程へ (273)	
2	近代化のなかの災害とその変容	276
	自然を抑え込む (276) 人間と「自然」(277) 防災技術の功罪 (279)	
3	都市と災害	280
	都市の近代化 (280) 災害からみた日本の都市 (281)	
4	東日本大震災が意味するもの	283
	3・11以後を考える (283) 広域システム災害 (284) 地方	

参考文献 291

索引 302

Column 一覧

序 コミュニティ	13
① 第一次集団	31
② 前産業型都市	49
③ 空間構造分析を支える技術	65
④ 新しい公共とコミュニティ政策	84
⑤ アーバニズムと非通念性	102
⑥ ルフェーヴル『都市革命』の衝撃	127
⑦ 大阪——「東洋のマンチェスター」の苦悩	147
⑧ インナーシティのスラムとドヤ街	163
⑨ 高齢化する郊外	177
⑩ 日本都市の発展類型	205
⑪ 衣料産業のグローバルな再編と都市の役割	226
⑫ 近代化理論と世界システム理論	251
⑬ ソーシャル・キャピタル——結束型と橋渡し型	269
⑭ 災害とコミュニティ	290

本文中で参照された文献は（著者姓 刊行年，引用元のページ）の形式で表記し，欧文献は原則として原著のみ指示した。ただし，翻訳書からの直接引用の場合には，（著者姓 刊行年＝翻訳年，引用元のページ）とし，翻訳書の該当ページを記載している。参考文献は巻末に一括して著者名アルファベット順で掲載した。本文中の写真のうち出所表記のないものは，すべて著者が撮影した。

序章

都市社会学の問い



六本木ヒルズ——私たちは都市とどのように関わることができるのか？

都市社会学の問いは大きく分けて3つある。①都市はなにを生み出すか、②なにが都市を生み出すか、そして③都市とはどのような過程であるのか。本書はこの3つの問いを軸に編集されている。第Ⅰ部は、都市はなにを生み出すかという問いに沿って、その核心にある、都市は私たちの生活をどのように変えるのかという問題をあつかう。第Ⅱ部は、なにが都市を生み出すかという問いに沿って、現代都市の変化についてあつかう。第Ⅲ部は、都市を時間と空間のなかの社会過程ととらえて、私たちが都市とどう関わることができるのかを考える。

1 君たちはどう生きるか

「広い世の中の一分子」

盧溝橋事件が起こった1937年に出版された吉野源三郎『君たちはどう生きるか』の冒頭に、主人公のコペル君が叔父さんといっしょに銀座のデパートの屋上から東京の街を見下ろしている場面が出てくる。「いったい、ここから見えるところだけで、どのくらい人間がいるのかしら」(吉野 1982, p.14)。叔父さんと話をしながら、コペル君は、考え込んでしまう。「人間て、まあ、水の分子みたいなものだねえ」(吉野 1982, p.16)。叔父さんは、この日のノートに、コペル君のこの日の体験の意味を、コペルニクスの地動説に結びつけて、説明する。コペル君は、それまで世の中が自分を中心に動いているように見えていたのが、このとき、自分が広い世の中の一分子であることにしみじみと気づいた。それは、広い宇宙が地球を中心に回っていると考えていた天動説から、じつは地球のほうが太陽のまわりを回っていると唱えた地動説に転換したようなものだ、と。

叔父さんのノートは、さらに語りかける。「子供のうちは、どんな人でも、地動説ではなく、天動説のような考え方をしている」。「それが、大人になると、多かれ少なかれ、地動説のような考え方になって来る」。「しかし、大人になるとこういう考え方をするのは、実は、ごく大体のことに過ぎないんだ」。「たいがいの人が、手前勝手な考え方におちいって、ものの真相がわからなくなり、自分に都合のよいことだけを見てゆこうとするものなんだ」(吉野 1982, pp.25-6)。この経験を忘れないように、主人公はコペル君と呼ばれるようになった。

コペル君が、天地がひっくり返るようなコペルニクスの転回を経験したのは、デパートの屋上から都市を眺めていたときであった。君たちも都市社会学を学ぶことによって、コペル君と同じような経験をしてもらいたい。ふだん何気なく体験している都市、自分を中心に天動説風に眺めている都市を、何百万、何千万もの人びとが生きているコミュニティとして理解するという、コペルニクスの転回を経験してほしい。そして、そのようなコミュニティの一員として、自分はなにができるのか、なにをやりたいのか、なにをなすべきかを考えられるようになってほしい。

人はなにを生みだすか

ところで、『君たちはどう生きるか』のなかに、「貧しき友」という話がある。同級生の浦川君は、学校でいじめられているが、じつは朝早くから家業を手伝っており、「生産する人」なのだ。叔父さんはコペル君に語りかける。そのうえで、叔父さんはコペル君にひとつの謎をかける。君は、なにひとつ生産していない。「しかし、自分では気がつかないうちに、ほかの点で、ある大きなものを、日々生みだしているのだ。それは、いったい、なんだろう」。叔父さんはこの答えをわざと言わない。「しかし、お互いに人間であるからには、誰でも、一生のうちに必ずこの答を見つけなくてはならないと、僕は考えている」(吉野 1982, pp.141-2)。

この問いに対する答えを、吉野はこの本で述べていない。この問いは、社会科学にとって、そして人生にとって、根本的な問いのひとつである。したがって、その答えは、いろいろでありうる。しかし、吉野がこれを書いたとき、ある答えを想定していたことは、察しがつく。そして、この都市社会学の教科書でも、この問いに対するある答えを想定している。それは、おそらく、吉野が想定していた答えを含んではいるものの、いくら違うものであろう。もちろ

ん、その答えをここで示すようなことはしない。「自分自身で見つけること、それが肝心だ」(吉野 1982, p.142)。

2 都市社会学の3つの問い

社会学から 都市社会学へ

「君たちはどう生きるか」は哲学の根本問題のひとつ、そして「人はなにを生み出すか」は社会科学の根本問題のひとつである。社会学、そして都市社会学は、こうした問題に接近するひとつの切り口を提供しているにすぎない。

社会学は、18世紀末に英国から生じた産業革命とフランスの市民革命の衝撃を受けて、ヨーロッパで生まれた。それは、人びとが社会の変化を経験し、それをつうじて「社会」が考察の対象となるものであると気づいたときに始まった。いったい社会でなにが起こっているのか、私たちはそれにどのようにかわれば良いのか。19世紀のヨーロッパ社会学は、そうした大きな問題に取り組むところから始まった。

20世紀に入ると、社会学は米国に波及し、新たな土地でさらに成長した。米国では、19世紀の後半から20世紀の初頭にかけて、工業化と都市化が急速に進んだ。ヨーロッパからの移民が集中し、これまでに経験したことのない大都市が出現したのである。大都市で発生した社会の混乱に直面して、米国の社会学は、ヨーロッパから学んだ書齋の学問と、地元の都市での社会改革運動が混ざりあい、独特の発展を遂げた。社会学は、社会改革運動を科学的に正当化しようとする試みから始まり、やがて、フィールドワークによってデータを集め、それをもとに客観的な因果連関を解明する学問へと脱

皮していった。こうして、都市社会学は、米国で、都市問題を扱う社会学として出発した。

都市社会学には、大きく分けて3つの問いがある。①都市はなにを生みだすか、②なにが都市を生みだすか、③都市とはどのような過程であるのか、という3つである。

都市はなにを生みだすか

第一の「都市はなにを生みだすか」という問いは、20世紀初頭のシカゴで、社会学が都市問題に取り組むなかで生まれ、こんにちまでつづく研究の蓄積がある。この問いに対する最初の答えは、都市はコミュニティ(共同体)を解体し、人びとを孤立させるというものであった。都市にみられる犯罪・非行その他の病理現象も、コミュニティの解体によるものであると考えられた。これは、こんにちでもある程度までは真理である。

しかし、この答えにはふたつの疑問が投げかけられた。第一の疑問は、現実の都市の調査から生まれてきた。大都市の真ん中でも、親戚づきあいもあれば近所づきあいもある。都会人の生活がとりわけ異常というわけでもない。都市には都市なりにコミュニティが存続しているのではないか。第二の疑問は、もっと理論的なものである。都市の一部には、たしかにコミュニティが崩壊していたり、犯罪が多発する治安の悪い場所があるかもしれない。しかし、その原因は、都市そのもの、つまり、人口の大きさや人口密度の高さではなく、貧困や、教育の欠如や、地域の流動性などに求めるべきではないのか。こうして、都市は、なにか独特の無秩序を生みだすわけではなく、貧富の差のような経済的な条件や、未婚者が既婚者か、あるいは小さな子どもがいる子育て期の家族かといった家族の状況、そして、移住してきたばかりの人か、長年その都市に住んでいる人かといった居住経験などによって、それぞれ異なる生活の仕方や価

価値観があるだけだという考え方が有力になった。都市はなにも生みださない。

しかし、この答えも不十分である。都市は良かれ悪しかれ、なにか新しい、普通と違う、変わったものを生みだしてきたからである。都市では、新しい出会いをつうじて、これまでとは違った価値観や行動様式が育まれるのではないのか。都市は、通念とは異なる新しい文化を生みだす。これが3つめの答えである。これらの答えはすべて、基本的なアイデアにすぎない。基本的なアイデアからは、さらにさまざまな問いが派生する。そして、これらの問いと答えをめぐって、現在でも、調査研究が進められている。そのなかから、もっと斬新なアイデアが生まれてくるかもしれない。

なにが都市を生みだすか

第二の「なにが都市を生みだすか」は、論理的には第一の問いに先立って問われるべきもののように思える。しかし、じっさいには、1970年代以降に、本格的に問われるようになった。それには、それなりの背景がある。それまで、工業化にともなう都市化の趨勢は疑いようがなかった。ところが、1970年代に入り、先進工業国の諸都市は、転換期を迎えた。それまでの工業化による経済成長のパターンが危機におちいり、そのために都市の衰退現象が見られるようになった。都市は危機と再編の時代を迎え、「なにが都市を生みだすか」が切実な問いとなった。また、第二次世界大戦後、都市開発に国家が政策的介入を強めたことも、なにが都市を生みだすかという問いを浮上させる伏線になっていた。

1980年代以降は、情報技術革命や経済のグローバル化による資本主義経済の転換が、都市の成長と衰退に、複雑な影響をもたらすようになった。ニューヨークやロンドンのように、危機を脱してグローバル経済の金融センターとして繁栄する都市も現れてきた。そ

の一方で、多くの先進諸国の工業都市は、脱工業化によって衰退の危機に直面した。こうしたことから、とくに資本主義の転換と関連づけて、都市の危機と再編を解明する政治経済学的なアプローチが生まれてきた。いまや、都市化の時代が過ぎ去りつつある先進諸国だけでなく、グローバル経済に参入して急速な都市化を経験している新興工業諸国においても、ますます多くの人びとが、都市を持続的に発展させていくにはどうしたらよいのかという問いに直面している。

都市とはどのような過程であるのか

第三の「都市とはどのような過程であるのか」という問いは、ある意味では、「都市はなにを生みだすか」という問いと「なにが都市を生みだすか」という問いの総合である。現実の都市は、さまざまな力が作用する社会過程である。さまざまな力が都市をつくり、都市になにかをもたらし。

しかし、それを一般的に理解することは難しい。なぜなら、都市の過程は、じっさいには、時間と空間のなかでの特殊な社会過程であるからである。最初のふたつの問いは、都市がどれも似通っており、どの都市にも共通する一般的な答えがありうるという前提に立っている。この前提は、ある程度までは正しい。しかし、じっさいには、都市は、どれも同じではなく、それぞれ、異なっている。最初のふたつの問いは、いずれも、こうした特殊性を取り除いて、一般的な答えだけを見つけ出そうとしてきた。それに対して、第三の問いは、都市を、時間と空間のなかで具体的に理解することをめざすものであり、そこに一般性と特殊性の双方を見いだそうとするものである。

このアプローチには、独特のメリットがある。具体的な都市の過程は、人びとの活動から成り立っているからである。政府、さまざま

まな企業や市民団体などが、この過程にかかわっている。私たちの行動には、さまざまな制約があるものの、その一方で選択の機会もひらかれている。都市の過程は、終わりのないストーリーである。この過程を理解することは、政府や企業の一員として、そしてなによりも市民として、この過程にどのようにかかわることができるのかを理解することにつながる。

3 都市とはなにか

都市社会学があつかう「都市」とはなんであろうか。都市社会学が完成された知識の体系であるのなら、都市の定義から始めるべきであったであろう。しかし、じっさいには、都市の定義は、論者によってさまざまである。おおざっぱに、つぎの3つに分けられる。

人口学的定義

人口学的（生態学的）定義とは、都市とは、人口の集中している場所であるという定義である。都市とは、規模が大きく、密度が高く、異質性の高い居住地であるというルイス・ワースの有名な定義は、その最も代表的なもののひとつである（Wirth 1938）。この定義は、人口の集中が、どのような生活様式を生みだすか、とりわけコミュニティにどのような影響をおよぼすかという都市社会学の最初の問いと結びついていた。

物的定義

物的定義とは、都市とは、道路や建物などの物的構造からなる人工的環境であるという定義である。これらの物的構造は、それ自体、社会的に生産され、都市生活の基盤として機能し、都市生活の質に影響をおよぼす。都市を建造環境としてあつかうデイヴィッド・ハーヴェイの定義は、

その典型的なもののひとつである。ハーヴェイは、資本主義は、過剰蓄積の危機を回避するために、建造環境の創造的破壊に向かわざるを得ないという (Harvey 1989)。つまり、都市再開発は、だぶついた資金のはけ口になるというわけだ。ここから、なぜ都市の再開発事業がつぎつぎと立ち上がるのかが説明できる。

制度的定義

制度的定義とは、ある社会の政治・行政制度において、「都市」とされている団体を都市とみなすものである。マックス・ウェーバーの「政治的・行政的都市概念」は、その例である (Weber 1956)。都市政策の決定過程や、市民参加・市民協働について考える場合には、この定義は避けられない。また、統計データを分析する場合にも、都市の空間的単位として、制度的定義を受け入れることが多い。

その他の定義

このほかに、都市を「市場定住地」(市場を中心とする定住地) であるとするマックス・ウェーバーの定義 (Weber 1956) や、都市とは「社会的交流の結節機関が集まっている^{しゅうらく}聚落」であるとする鈴木榮太郎 (1969) の定義、都市を、規模が大きく、密度が高く、非農業人口が多い集落であるとする倉沢進 (1962) の定義などがある。都市は、複合的な現象だから、さまざまな要素を組み合わせた定義を考案することが可能であろう。重要なことは、ある理論の体系のなかでその定義が有効であるかどうか、そしてその理論に、ある問いに答えを出していく能力がそなわっているかどうかである。その意味で、先立つものは、やはり問いなのである。

事項索引

■ あ 行

アーティスト 191, 192, 195, 196, 197, 200, 201, 208
 アーバニズム 32-49, 69, 167 →都市
 度
 —とパーソナル・ネットワーク
 93-100
 —と非通念性 43-44, 46, 47, 102
 —の下位文化理論 →下位文化理論
 生活様式としての— 36-37
 生活様式としての—: 検証
 95-100
 生活様式としての—: 批判
 38-39, 49
 飽きの態度 37 →欲楽に飽きた態度
 アジア通貨危機 189
 アセット・マネジメント 263-265
 新しい公共 78, 81, 84, 256
 アドボカシー 265
 アノミー 35
 アントワープ 216
 移 住 99-100
 イタリア人 18, 39, 58
 移動性 102 →流動性
 移 民 26, 27, 39, 51, 53, 58
 —の態度変容 22-23
 —労働者 152
 シカゴにおける— 18, 21-22
 衣料産業 226
 衣料デザイナー 208, 215-223
 衣料デザイン 208-210, 226
 インド人 139
 インナーエリア 59, 118, 119, 263
 →インナーシティ
 インナーシティ 41, 149-161, 245, 250

→インナーエリア
 —の危機 154
 —の高齢化 153, 154
 —の定義 149
 —の問題 153-154
 裏原宿 →東京都渋谷区神宮前
 エスニック・コミュニティ 53, 152,
 154-161
 エスニック・サバープ 168, 175
 エスニック集団 13, 59, 154, 158, 160,
 161 →エスニック・コミュニティ,
 民族
 エスニック・ビジネス 157, 161
 エッジ・シティ 169
 NGO 249, 250, 253, 266, 269
 NPO 78-83, 201, 253, 265, 266, 269
 —法 →特定非営利活動促進法
 —法人 79-81, 192, 193, 220, 256
 地縁型— 82
 エンターテインメント・マシン 232
 オーガニゼーション・マン 166
 オークランド 94
 大 阪 73, 147
 —の郊外化 170
 大阪市 17, 107-9, 112, 152, 182
 あいりん地区 163
 —の人口推移 108, 116, 147
 —の人口動態 117
 オリピック 146, 147, 211, 213

■ か 行

外国人人口
 東京都新宿区の— 159
 東京都豊島区の— 155-156
 東京都の— 139-140
 階層別居住分布 124-126

- 開発業者 239-241, 246, 249 →デベ
 ロッパー
- 下位文化 25, 90
 — 集団 44
 — の強度 45-46
 — の多様性 45
 — の定義 44-45
 — の伝播 46
- 下位文化理論 34, 43-48, 93-98
 — の検証 95-100
- 『科学としての社会学入門』 28
- 革新 44, 47
- 革新自治体 186, 187
- 革新首長 174
- 仮設住宅 257-258
- 下層階級 29, 40
- 家族 31, 34, 38, 42, 49, 166, 173
- 家族意識 102
- 家族解体 29
- 家族周期段階 38
- 過密・過疎問題 110
- 環境問題 130
- 関東大震災 151, 170, 184, 284
- 寛容な態度 102 →相違に対する寛容
- 歓楽に飽きた態度 35 →飽きの態度
- 機械的連帯 35
- 北カリフォルニア 94
- 逆都市化 105-6, 107
- ギャング 28, 29
- 共同体づくり 234
- 凝離 25, 37, 57
- 居住年数 42, 99
- 居住分化 27, 50-64
 前産業型都市の— 49
- 近所づきあい 41, 42 →近隣社会,
 近隣関係, 隣人関係
- 近代化 273
 — と災害 276-283
 — と自然 276-277
 都市の— 151, 280-282
- 近代化理論 251
- 金融・保険・不動産業 121, 123, 136,
 150, 208 →FIRE産業
- 近隣関係 38, 167 →近所づきあい,
 近隣社会, 隣人関係
- 近隣社会 31 →近所づきあい, 近隣
 関係, 隣人関係
- 空間の生産 127
- クリエイター 191, 192, 195, 196, 197,
 200, 201
- グローバル化 10, 107, 109, 147, 182,
 282
 — とエスニック・コミュニティ
 160-161
 — と都市 6-7, 134-146
 — の定義 134
- グローバル金融センター 6, 136
- グローバル経済 112, 132-133
- グローバル都市 136, 208
- グローバルな人の移動 155, 161
- 継承(生態学) 24, 27 →遷移
- ゲーテッド・コミュニティ 168-169,
 175
- ゲートウェイ 158-159
- ゲゼルシャフト 34-35, 42
- ゲッター 29, 45
- ゲマインシャフト 34-35, 42, 93
- 建造環境 8-9, 127
- 建築家 196, 198, 200, 201
- 広域システム災害 284-286
- 郊外 41, 68, 69, 97, 98, 118-119,
 165-177
 — と年少人口 173
 — の起源 165-166
 — の高齢化 175, 177
 — の人種・民族的構成 168
 — の多様化 168-169, 174-176
 — の定義 165
 — の類型 169
 日本における— 170-176
 米国における— 166-169
- 郊外化 73-74, 100, 105, 107, 109, 165,
 170-174, 185
 — と人口動態 116, 117

- とホワイトカラー 118, 124-125
 - 第一次—— 109, 110-111, 118, 119
 - 第二次—— 109, 111-112, 119
 - 東京の—— 116, 118-119
 - 公害問題 174, 184
 - 工業化 4, 6, 122, 127, 129
 - 工業経済 107, 111, 126
 - 工業社会 127
 - 工業的發展様式 131-132
 - 工業都市 7, 111
 - 神戸市 170, 257
 - 高齢化 100, 123, 142, 144, 153, 163, 214, 290
 - 郊外の—— 175, 177
 - 高齢者 67
 - 『ゴールドコーストとスラム』 29
 - 個我 75-76, 290
 - 国勢調査(日) 57, 65
 - 国勢調査(米) 57, 168
 - 国民生活審議会 70, 74, 77, 84, 290
 - 個性化 36
 - 戸籍(中国) 238
 - 孤独死 68, 177, 257-258
 - コミュニティ 5-6, 13, 31, 33, 70, 75, 174
 - エスニック・—— 53, 152, 154-161
 - ゲートッド・—— 168-169, 175
 - 意識 74
 - 解放論 91, 92-93, 100
 - 協議会 71, 77
 - 形成 70-71, 74, 76-78, 82
 - 政策 76-78, 82, 84
 - センター 77
 - 喪失論 69, 91-92, 100
 - 存続論 69, 91-92
 - と地域共同体 70, 74-76
 - の衰退 34-36
 - の定義 13, 67, 93
 - の定義(国民生活審議会) 74
 - の定義(人間生態学) 24
 - ・モデル 75-76
 - ・モラル 76
 - 問題 91
 - 災害—— 290
 - 災害と—— 290
 - 多元参加型—— 82
 - 地域—— 13, 31, 33, 38, 42-43, 67-83, 92, 100, 264
 - 地域——の定義 68
 - バーチャル・—— 67
 - 有限責任の—— 42
 - リスク・—— 290
 - コミュニティ開発会社 264-265
 - コミュニティネス 76
 - 孤立化 37
- さ 行
- サークル活動 74
 - 災害 19, 272-288
 - 近代化と—— 275-280
 - とコミュニティ 290
 - 都市と—— 280-283
 - 再開発 →都市再開発
 - 再組織化 22-23, 27
 - 再都市化 106, 107, 109, 112-113, 120, 175
 - と社会構造 123
 - と人口動態 118
 - と知識労働者 123, 125
 - 在日コリアン 140 →朝鮮人
 - サバーバニズム 41, 69, 167
 - サブシステム 258, 260, 261
 - 産業革命 4, 129
 - 三大都市圏 73-74, 107-109
 - サンフランシスコ 45, 57, 94
 - サンベルト 133
 - GIS →地理情報システム
 - ジェントリフィケーション 154
 - シカゴ 5, 45, 65, 111, 133, 152, 166
 - における移民 18, 21-22
 - のコミュニティ新聞 42
 - の発展 17-20
 - シカゴ学派 35, 39, 40, 51, 68 →シ

カゴ社会学
シカゴ社会学 20-29
シカゴ大火 18, 19
シカゴ大学 20, 21, 28, 36, 39
シカゴ・モノグラフ 28
市場定住地 9
自治会 69-73 →町内会
自治省 76 →総務省
ジニ係数 143
支配(生態学) 24, 27
自発的結社 42, 94 →ボランティア
ー・アソシエーション
シビル・ミニマム 75, 187
資本の都市化 127
市民活動 78-83
市民参加 9, 203
市民社会 266-269
社会改革運動 4, 20
社会解体 22, 23, 27, 29, 38, 39, 40,
41, 167
社会過程 7, 10-11, 26, 29
社会関係 87-89
——の多重性 88
——の強さ 88
社会構成理論 41, 43, 44, 167
社会地区分析 56-57, 60, 65
社会的異質性 36
社会的企業 234, 261-265
英国の—— 261-262
米国の—— 262
社会的ネットワーク →ネットワーク
都市化と—— 100
社会的分化 35
社会的分業 35, 91, 92
上海 145, 234-243, 249
浦東 234-235
——のGDP 238-239
——の所得格差 239
集会的消費 127
従属理論 251
住宅改革(中国) 239
住宅階級 59

住宅権利運動 241-243, 245-246,
248-249
住宅地帯 26, 27, 52
住宅ローン 166
住民運動 70, 74, 78, 174
住民参加 286
住民組織 71
首都圏 114
首都直下型地震 283
主流文化 46
状況の定義 22
少産少死社会 278
少子化 278, 290
情報化 10, 109, 131, 142, 147
情報革命 131-133
情報経済 107, 113
情報サービス経済 123
情報的發展様式 131-132
上流階級 26, 29, 52, 58
職住分離 151
シンガポール 238
新興工業国 7, 226, 251
人口動態 117
郊外化と—— 116, 117
再都市化と—— 118
都市化と—— 116, 117
親族 92, 95
親族関係 38, 95, 99
都市度と—— 95, 97
親族集団 31, 34, 97
新都市社会学 131
侵入 24, 27, 54
推移地帯 26, 27, 29, 51, 53, 149
『ストリート・コーナー・ソサエティ』
39
スラム 20, 29, 38, 39, 40, 53, 149, 163
——の再開発 245-250 →都市再
開発
——住民の正規化 246, 248-249
生活周期段階 41 →家族周期段階
生産者サービス 136
政治行政の都市概念 9

- 生態学的決定理論 43
 成長マシン 231
 世界システム理論 134, 251
 世界都市 111, 134-135, 136-138
 世界都市仮説 134-135, 137-138, 145
 石油危機 111, 153, 157
 セクター（東京） 61, 62, 63
 セクター理論 55
 セレクト・ショップ 211, 215,
 217-223
 遷移（生態学） 54 →継承
 前産業型都市 49
 相違に対する寛容 37 →寛容な態度
 創造産業 183, 191, 202
 創造都市 182-204
 総務省 78, 84 →自治省
 ソウル市 228-234, 238
 ——の都市化 229
 ソーシャル・キャピタル 67, 269
 橋渡し型—— 269
 結束型—— 269
 ソサエティ 24
 村落 31, 34, 47, 68, 95, 97, 98
 村落共同体 13, 42
- た 行
- 第一次郊外化 109, 110-111, 118-119
 ——と社会構造 122
 第一次集団 31, 40, 91-92, 167
 第一次的關係 25, 31, 167
 第一次の接触 31, 37, 69
 第一次の紐帯 31, 91, 92
 大都市圏 153, 287
 第二次郊外化 109, 111-112, 119
 ——と社会構造 122-123
 第二次集団 31
 第二次的關係 25, 31
 第二次の接触 69
 多核心理論 55-56
 多産少死社会 278
 多産多死社会 278
 脱工業化 7, 131, 147, 182
- ダルドンネ 229-230
 団地 172
 団地自治会 70 →自治会, 町内会
 団地族 172
 地域共同体 70, 74, 75-76
 地域協働体 84
 地域コミュニティ 13, 31, 33, 38,
 42-43, 67-83, 92, 100, 264
 ——の定義 68
 地域集団 31
 知識生産 208
 千葉県松戸市常盤平団地 177
 中間支援組織 265
 中国 145
 中国人 139, 155, 156-158
 中産階級 26, 27, 40, 154, 170
 中心業務地区 51, 55, 149
 朝鮮人 147, 152 →在日コリアン
 朝鮮戦争 110, 228
 町内会 69-73, 220, 221
 ——の機能 71
 ——の組織 71
 ——見直し論 71
 町内会論争 69
 直轄市（中国） 236
 清溪川 228, 230
 地理情報システム 65
 通勤者地帯 26, 27, 52
 テクノロジー 49
 デザイン・ソウル・プロジェクト
 232
 デトロイト 111, 133
 デベロッパ 166, 172, 213-214 →
 開発業者
 伝統型アノミー 75
 東京 70, 73, 99, 107-109, 111,
 112-125, 135, 136, 145, 208
 ——オリンピック 146, 211, 213
 ——の空間構造 61-64
 ——の郊外化 116, 170-171
 ——の再都市化 116
 ——の定義 113-14

—の都市化 114-115
 —の都市再編 136-146
 丸の内 151
 東京圏 61, 74, 114, 172-173, 186
 —の空間構造 62
 —の人口増加率 171-173
 東京市 113, 115, 151
 東京大空襲 115
 東京都 113
 江戸川区西葛西 139
 山谷 163
 渋谷区 143
 渋谷区神宮前 209-224
 新宿区 159, 160
 新宿区大久保地区 139, 158
 杉並区 70
 多摩市 125
 多摩地域 73, 113-114, 116, 170
 特別区 113
 豊島区 155-156
 豊島区池袋地区 139, 156-158, 160
 中野区 77
 西東京市 82
 —23区 →東京都特別区
 —の外国人人口 139-140
 —の外資系企業 140
 —の階層別居住分布 124-126
 —の産業別就業人口 121-123, 141
 —の職業別就業人口 121-123
 —の人口推移 108, 114-116
 —の人口動態 117-118
 —の地域間格差 143
 日野市 70
 三鷹市 70, 77
 三鷹市牟礼団地 173
 武蔵野市 77, 125
 目黒区 77
 東京府 113, 115, 129
 同心円（東京） 61, 62, 63
 同心円地帯理論 26-28, 29, 51-54, 65, 165

—への批判 55-61
 動的密度 35, 37, 45
 道徳地域 25-26, 90
 同類結合の原理 90, 95
 ドーナツ化 105, 111, 118-119
 特定非営利活動促進法 79-80, 256
 匿名性 151, 157, 280
 都市 31, 47, 49, 68
 実験室としての— 26, 149
 —空間構造 54, 55-65 →居住分
 化
 —再開発 9, 40, 107, 112, 120, 127, 160, 195, 202, 229, 236, 239-243, 263
 —とコミュニティ 5-6, 33
 —と災害 280-283
 —と文化 6, 33
 —の危機 6-7, 130
 —の再編 6-7, 113, 125, 133, 137-146
 —の人口学的定義 8, 10
 —の制度的定義 9
 —の定義 8-9, 36, 44
 —の物的定義 8, 10
 「都市」（パーク） 25, 26
 都市化 4, 6, 70, 73-74, 105, 106, 109-110, 127, 150-152
 ソウルの— 229
 東京の— 114-115
 —とコミュニティ・モデル 75
 —と社会構造 122
 —と社会的ネットワーク 100
 —と人口動態 116, 117
 都市革命 127
 都市型社会 77
 都市化論争 49
 都市圏 105
 —の発展段階 105-126
 —の発展段階：西ヨーロッパ 105-107
 —の発展段階：日本 107-125
 都市再生機構 186 →日本住宅公団。

UR 都市機構
都市社会 127
都市社会運動 127
都市社会学 4-8, 11, 38
都市デザイン 186-187, 201
都市度 94 →アーバニズム
——と親族関係 95, 97-98
——とパーソナル・ネットワーク
93-100
——と非通念性 102
——と友人関係 96, 98-99
——と隣人関係 95, 98
都市への権利 127
都市問題 5, 130
途上国 251
土地改革 (中国) 239-240
ドヤ街 163
トロント：イーストヨーク 92

■ な 行

仲間集団 31, 40, 98
仲間集団社会 40
名古屋 73, 99
名古屋市 17, 102, 107-9, 112, 202
——の人口推移 108
——の人口動態 117
南海トラフ地震 283
二重都市 136-137, 143-144
日本住宅公団 111, 172, 185 →都市
再生機構, UR 都市機構
ニュータウン 230-231, 236
ニューヨーク 6, 17, 111, 135, 136,
138, 145, 154, 166, 208, 216
人間関係の分節化 37, 88
人間生態学 24-25, 51, 130-131
——：コミュニティ 24
——：ソサエティ 24
ネットワーク 67 →社会関係, パー
ソナル・ネットワーク
カテゴリーカル・—— 89
サポート—— 88
社会的—— 85-100

社会的——：定義 86
——の異質性 90
——の定義 86
——の同質性 90
——の密度 89-90, 92
——分析 86-93
農 村 68, 110, 130, 239 →村落

■ は 行

パーソナル・ネットワーク 89, 93-99
→ネットワーク
アーバニズムと—— 93-100
移住と—— 99
——の規模 89
バーチャル・コミュニティ 67
ハーバード構造主義 87
ハーバード大学 23, 87, 90, 93
パーミンガム 58-59
場所の空間 133
バブル経済 112, 119-120, 123, 125,
143, 145, 150, 174, 189, 213-215, 217,
284
パ リ 216, 226
ハル・ハウス 20, 21
漢江ルネッサンス事業 232
BankART1929 192-196, 199, 200
犯 罪 25, 27, 44, 51, 154, 280
阪神・淡路大震災 71, 272
——とボランティア 253, 255,
257-259, 266
阪神間モダニズム 170
反成長マシン 233
控えめな態度 35, 37
比較都市社会学 49
東日本大震災 68, 156, 253, 260, 270,
272, 273, 278, 282, 283-288
——とボランティア 254, 260, 266
非 行 25
被災地 NGO 協働センター 259
非通念性 43-44, 46, 47, 102
貧 困 51
貧困層 39, 229, 247

FIRE 産業 142 →金融・保険・不動産
産業

福島第一原子力発電所事故 156, 271,
273, 285, 286

ブルーカラー 98, 100, 122, 124 →
労働者階級

フロアの空間 132-133

文化行政 187, 201

文化生産 208, 210, 224

文化生態学 57-58

分極化 136-137, 143-144

北京 147, 236

ヘゲモニー国家 251

防災

地域—— 71

——技術 280-282

——コミュニティ 290

ホーボー 28

ポーランド人 18, 21-22

『ポーランド農民』 →『ヨーロッパとア
メリカにおけるポーランド農民』

ボストン 45

ウェストエンド 40

コモン 58

ノースエンド 39, 58

ビーコンヒル 58, 60

ボランティア・アソシエーション

78-79 →自発的結社

ボランティア・エコノミー 259

ボランティア 253-261

ホワイトカラー 63, 100, 111, 122,
124-125, 166, 174 →中産階級

■ま行

まちづくり 77

まちづくり協議会 220-223

みなとみらい21 (MM21) 186, 189,
191, 201

ミラノ 208, 226

民族 34, 38

無関心 35, 37, 70

無向グラフ 87

ムンバイ 243-250

ダラヴィ 249

森ビル 195-196, 201, 221

■や行

UR 都市機構 193 →日本住宅公団,
都市再生機構

有機的連帯 35

有限責任のコミュニティ 42

有向グラフ 87

有償ボランティア 259

友人 92, 96, 100

友人関係 34, 38, 99, 173

都市度と—— 96, 98-99

ユダヤ人 18, 29, 37

用途地域指定 186, 212-213

『ヨーロッパとアメリカにおけるポーラ
ンド農民』 21-23

横浜市 73, 174-175, 182-204

寿地区 163

中区黄金町 199, 203

——の六大事業 185-186

横浜大空襲 184

横浜トリエンナーレ 187-188, 195,
197, 199

寄せ場 163

■ら行

リーマン・ショック 201

リスク・コミュニティ 290

流動性 41, 150, 157, 163, 173 →移
動性

臨界量 46

隣人 95-96, 100

隣人関係 34, 38, 42 →近所づきあ
い, 近隣関係, 近隣社会

居住年数と—— 99

都市度と—— 95, 98

ループ 26, 51

歴史的建造物 187, 189

歴史的建築物 191, 201

労働運動 19, 78

労働者階級 26, 27, 40, 154 →ブルー
ーカラー
労働者居住地帯 26, 27, 29, 51, 53
ロサンゼルス 17, 57

ロンドン 6, 111, 135, 136, 138, 145,
165, 208, 216
ウエストウエイまちづくり事業体
263

人名索引

■ あ 行

飛鳥田一雄 184, 186
阿利莫二 70
アンダーソン, ネルズ 28
井口典夫 220-221
池田 修 192, 193, 194, 195, 198
石原慎太郎 145
李 明博 230-231
イリイチ, イヴァン 259-260
ウィリアムズ, マリリン 57, 65
ウェーバー, マックス 9
ウェルマン, バリー 31, 91-93
ウォーラーズテイン, イマニュエル
134
ウルマン, エドワード・L 55-56
奥田道大 173
呉 世勲 232

■ か 行

ガーリユー, ジョエル 169
カステル, マニュエル 59, 60-61,
127, 130-133, 137
金子郁容 255
カルヴァー, ヘレン 21
川俣 正 197
ガンズ, ハーバート 40, 92, 168
北沢 猛 189-190, 199, 200, 203
クーリー, チャールズ 31
クラーク, テリー・N 232
倉沢 進 9

■ さ 行

斉藤吉雄 76

サッセン, サスキア 122-123,
135-136, 137, 142, 145, 208
サリバン, ルイス 19
シェヴキー, エシユレフ 57, 65
ジェームズ, ウィリアム 23
ジャノウィッツ, モリス 42, 92
ショバーク, ギデオン 49
ジンメル, ゲオルク 35, 37
鈴木榮太郎 9
鈴木 広 76
ズナニエツキ, フローリアン 21-22
スモール, アルビオン 21, 23
スラッシュャー, フレデリック 28
ゾーボー, ハーヴェイ 29
園部雅久 137, 144

■ た 行

田村 明 186, 188, 189
鄭 恩寵 241
デューイ, ジョン 23
デュルケム, エミール 35, 37, 45
テンニエス, フェルディナント
34-35, 91
ドーア, ロナルド 70, 100
トマス, ウィリアム・I 21-23, 24

■ な 行

中田 宏 189-190, 202

■ は 行

ハーヴェイ, デイヴィッド 8-9, 127
パーク, ロバート・E 23-26, 28, 31,
36, 37, 59
パージェス, アーネスト・W 23, 24,

26-28, 36, 51, 57, 59, 149, 163, 165
ハーバー, ウィリアム・レイニー 20
朴 元淳 233-234
橋下 徹 147
パットナム, ロバート 269
ハバーマス, ユルゲン 266
林 文子 202, 203
ハリス, チャウンシー・D 55, 56
ファーヴァ, シルヴィア・F 167
ファイアレイ, ウォルター 57-59, 60
フィッシャー, クロード・S 34,
43-48
フリードマン, ジョン 134-135, 136
フロリダ, リチャード 232
ベル, ウェンデル 57, 65
ヘンダーソン, チャールズ 21, 23
ホイト, ホーマー 55
ホワイ特, ウィリアム・F 39
ホワイ特, ウィリアム・H 166-167

■ ま 行

マウラー, アーネスト 29
町村敬志 137
マッキーヴァー, ロバート 67
ムーア, ロバート 58-59

■ や 行

山岡義典 78
吉野源三郎 2-4

■ ら 行

ランドリー, チャールズ 182
リースマン, デイヴィッド 167
ルフエーヴル, アンリ 127
レックス, ジョン 58-59

■ わ 行

ワース, ルイス 8, 29, 31, 33, 36-37,
40, 49, 91, 102, 167
ワシントン, ブッカー・T 23

■ 編者紹介

松本 康 (まつもと やすし)

1955年、大阪市に生まれる。

1984年、東京大学大学院社会学研究科博士課程単位

取得退学。名古屋大学文学部助教授、東京都立
大学大学院都市科学研究科教授などを経て、

現在、立教大学社会学部教授。

元日本都市社会学会会長（2003年9月～2007年9月）

近著に、『再生する都市空間と市民参画』（共編）ク
オン、2014年。『社会学ベーシックス4 都市的
世界』（分担執筆）世界思想社、2008年など。

訳書に、H. ガンズ『都市の村人たち』ハーベスト社、
2006年。松本康編『近代アーバニズム』日本評
論社、2011年など。

と し し や か い が く に ゆ う も ん
都市社会学・入門
Introduction to Urban Sociology

ARMA



有斐閣アルマ

2014年9月30日 初版第1刷発行

編者 松本 康
発行者 江草 貞治
発行所 株式会社 有斐閣

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町2-17

電話 (03) 3264-1315〔編集〕

(03) 3265-6811〔営業〕

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・萩原印刷株式会社／製本・牧製本印刷株式会社

©2014, Yasushi Matsumoto. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-22015-7

JCOPY 本書の無断複写（コピー）は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、（社）出版者著作権管理機構（電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。